

■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

***** : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

 : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。無償で、非営利かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 Today OCW 朝日講座「知の冒険」
Copyright 2013, 清水哲郎

The University of Tokyo / Today OCW The Asahi Lectures “Adventures of the Mind”
Copyright 2013, Tetsuro Shimizu

生 と 死 / living と dying

清水 哲郎

東京大学大学院人文社会系研究科
死生学・応用倫理センター 上廣講座

〈死ぬ〉ということ

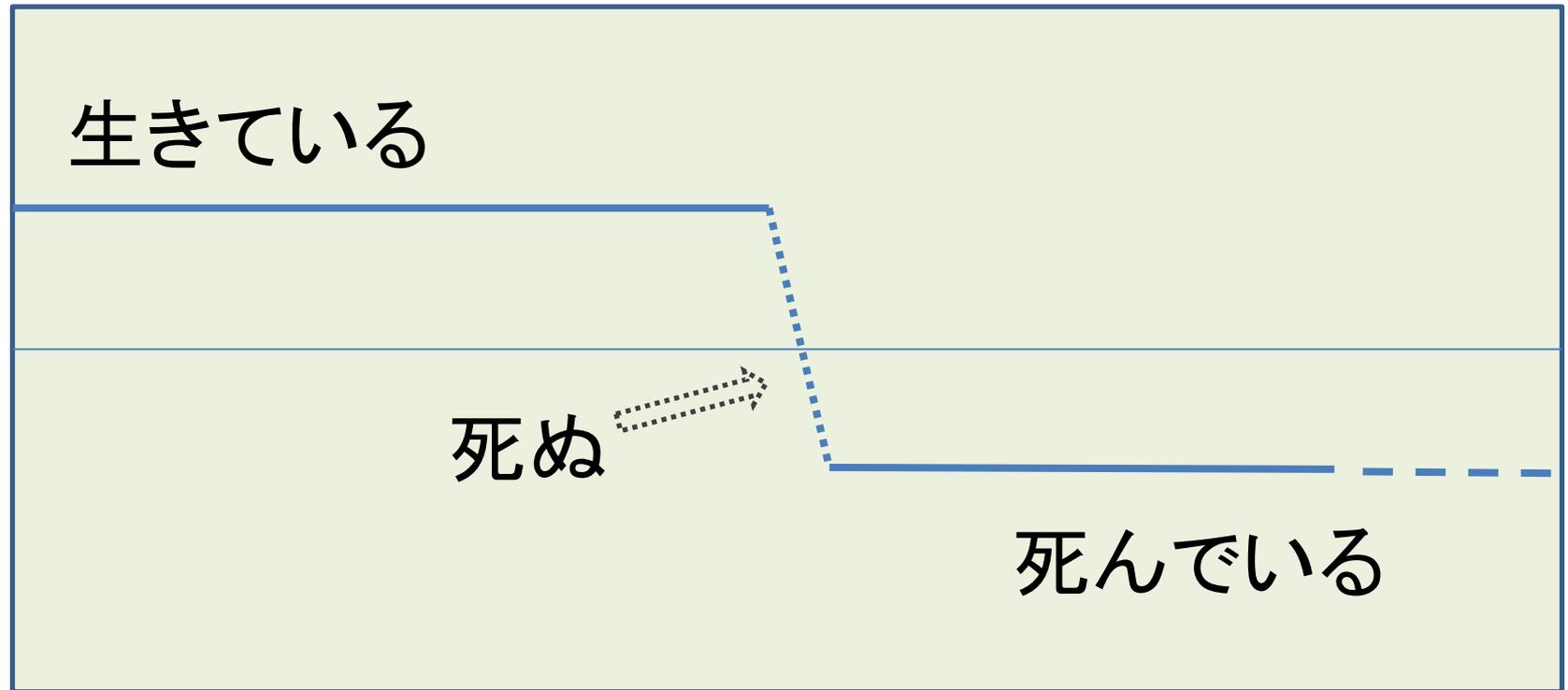
日本語「死ぬ」の二つの用法

- 「これはもう死んでいます」:何かを指して「死」という状態にあると言っている。
- 「父はもう死にました(もう居ません)」
目の前のものを指して言えない=
(この世にはいない⇒どこかに逝った? 消滅?)
 - この場合の主語は、かつて生きていた時の主体を指している
 - Cf 「滅びた都市」

身体の死

- 「これは死んでいる」: 身体を指して言っている
- 身体が死ぬということ
 - 動いていたものが動かなくなる
 - 再び動く可能性はない(=不可逆的)
 - 変質しはじめる
- 生物一般について言えること。
- 葬る対象
 - 同系統の語: 息を引き取る、はかなくなる?

身体の死



- 死の判定 「生きている」と「死んでいる」の境界

人の死

- 「Xはもう死にました」 語られる主体=人(格)
- 人(格)の死
 - 人格的交流ができなくなる 「別れ」
 - もう交流は再開しない(=不可逆的) 「永久の(別れ)」
- ここ(この世)には居ない (現世内)不在の主張
 - どこか(あの世)に行ったのか? 別世界移住
 - 「逝く・行く」こととして語られる →死者の世界の想定
 - 同系統の語: 逝く、亡くなる、旅立つ、身罷る、没する、他界す

人の死

生きている

死んでしまった

(もういない)

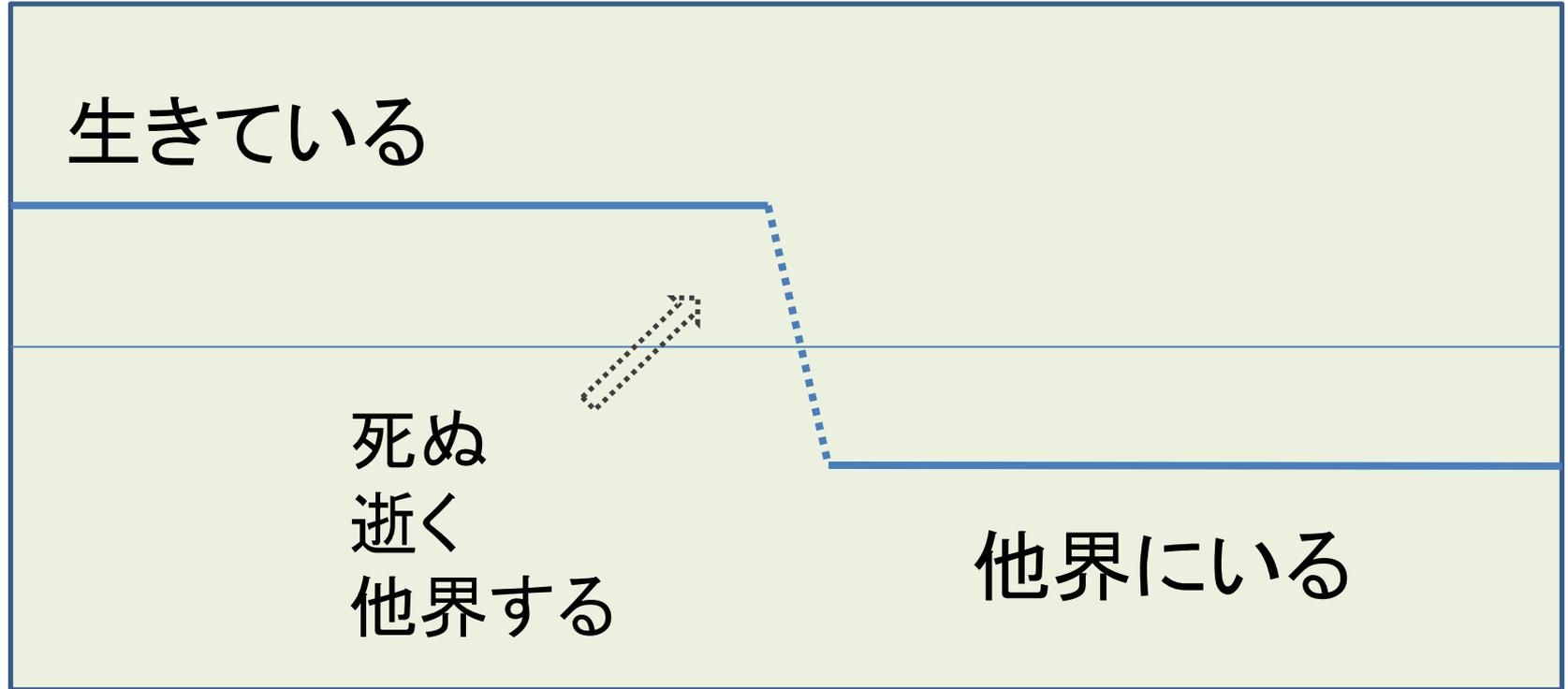


死ぬ

人の死

- 「Xはもう死にました」 語られる主体=人(格)
- 人(格)の死
 - 人格的交流ができなくなる 「別れ」
 - もう交流は再開しない(=不可逆的) 「永久の(別れ)」
- **ここ(この世)には居ない (現世内)不在の主張**
 - **どこか(あの世)に行ったのか? 別世界移住**
 - **「逝く・行く」こととして語られる →死者の世界の想定**
 - **同系統の語: 逝く、亡くなる、旅立つ、身罷る、没する、他界す**

人の死

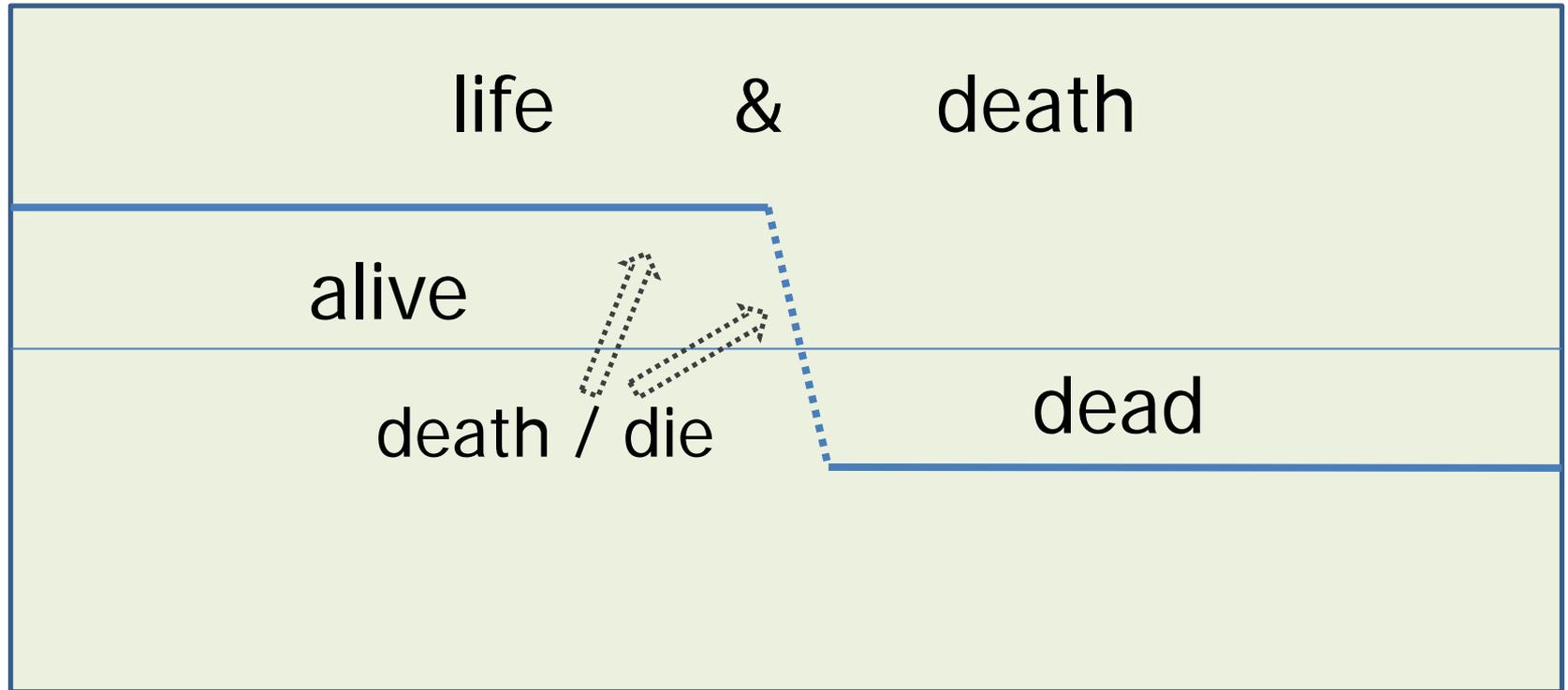


参考：人の死についての 別の語り方もある

- My father has been dead for ten years「父は10年間死んでいます」(＝10年前に死にました)
 - この世とあの世を包括する全体が話題領域になっている？／「to be dead 死んでいる」は「この世とは別の場所に存在している」こと？
 - 人の死についての、現世内不在／別世界移住とは異なる理解をしている？(以下の復活思想のところ而言及)
- 「Xは死にました」では、Xは在りし日のXを指している／「Xはあっちへ逝きました」は？／「Xはあっちで仲間と暮らしている」と別世界移住をあからさまに語る際には、話題領域は両世界全体

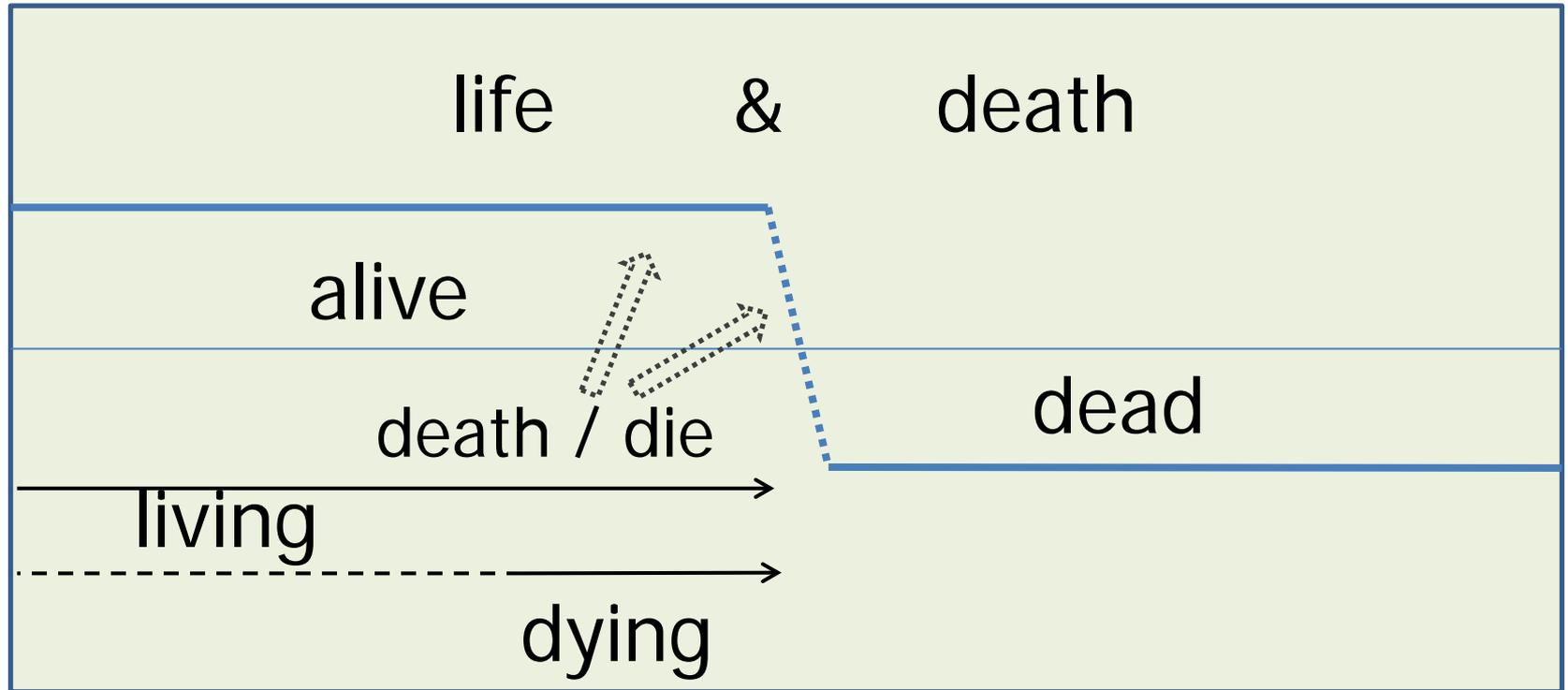
人の死?

身体の死?



人の死?

身体の死?



イザナミとイザナギの別れ



- イザナミの死
- イザナギはイザナミを連れ戻しにヨミ(黄泉)の国に訪ねていく > イザナミ登場
- 会話の記述があるだけ

* ©2010放送大学学園



著作権の都合により、
ここに挿入されていた画像は削除しました。

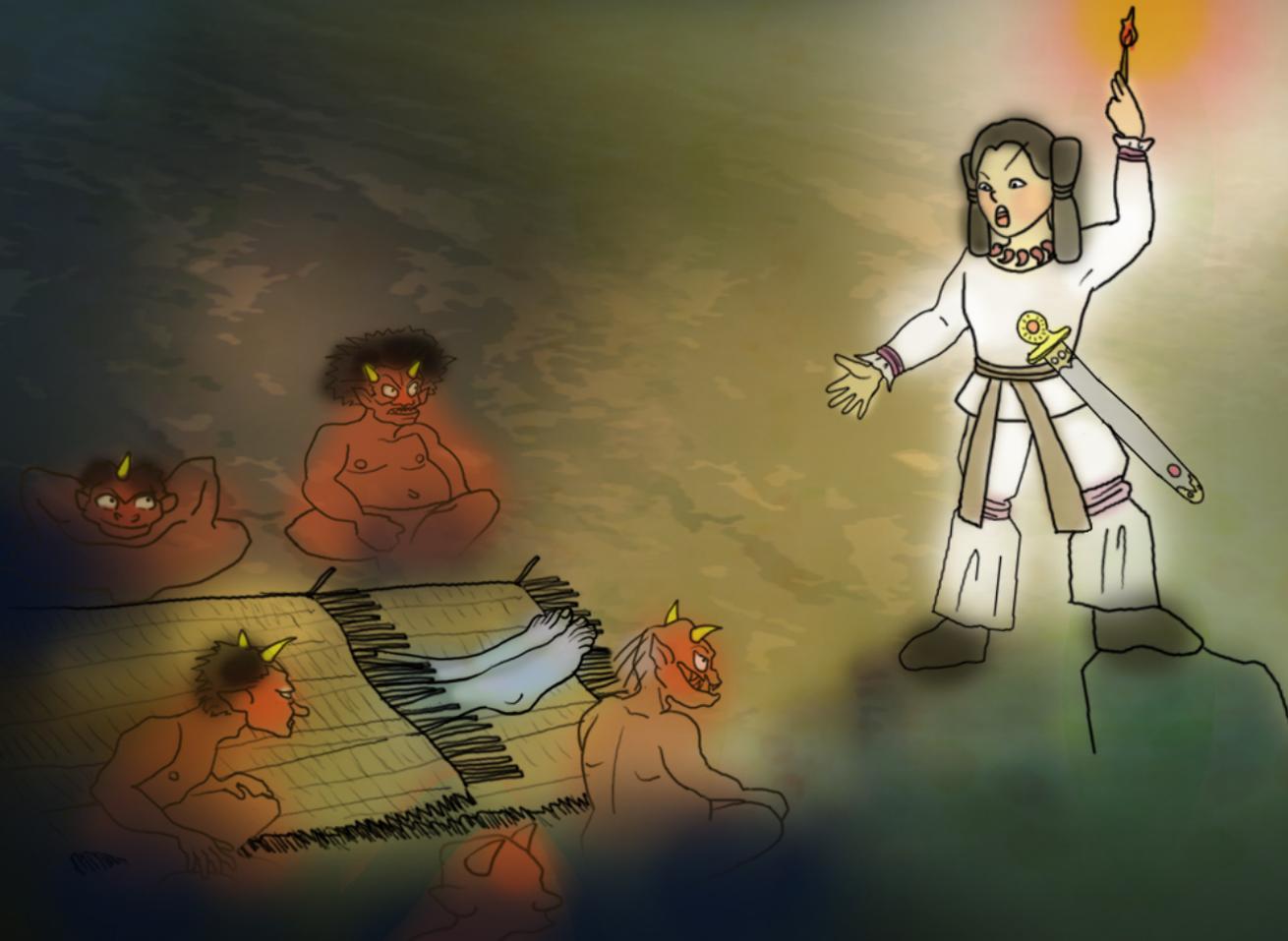
イタコ(口寄せ)の写真

- イザナミの死
- イザナギはイザナミを連れ戻しにヨミ(黄泉)の国に訪ねていく > イザナミ登場
- 会話の記述があるだけ

* ©2010放送大学学園

● cf 口寄せ

- イザナミは「相談してくる間、覗くな」と言う
- イザナギは覗いてしまう
— 身体が無残な変貌



イザナミとイザナギの別れ

- イザナミの死
 - イザナギはイザナミを連れ戻しにヨミ(黄泉)の国に訪ねる
 - > イザナミ登場 会話の記述があるだけ
 - 人格的交流の再開 cf 口寄せetc.
 - イザナミは「相談してくる間、覗くな」と言う
 - イザナギは覗いてしまう
 - 身体が無残な変貌
-
- 身体と人格の重なりと分離
 - イザナギーイザナミの物語りだけでなく、いろいろな場面で
人は死んであの世に逝った と 身体と共にある という、論理的には
両立しない考えが並存している

きゅうけつあいどう

泣血哀慟歌(1)

- 柿本朝臣人麻呂、妻が死にし後に泣血哀慟して作る歌二首
併せて短歌

天飛ぶや軽の道は我妹子が里にしあれば

ねもころに見まく欲しけど

やまず行かば人目を多み／まねく行かば人知りぬべみ

さね葛後も逢はむと大船の思ひ頼みて

玉かぎる磐垣淵の隠りのみ恋ひつつあるに

渡る日の暮れぬるがごと／照る月の雲隠るごと

沖つ藻の靡きし妹は／黄葉の過ぎて去にきと

玉梓の使ひの言へば

泣血哀慟歌(2)

梓弓音に聞きて[一に云ふ 音のみ聞きて]

言はむすべせむすべ知らに／音のみを聞きてありえねば

我が恋ふる千重の一重も慰もる心もありやと

我妹子が止まず出で見し軽の市に我が立ち聞けば

玉だすき畝傍の山に鳴く鳥の声も聞こえず

玉梓の道行く人もひとりだに似てし行かねば

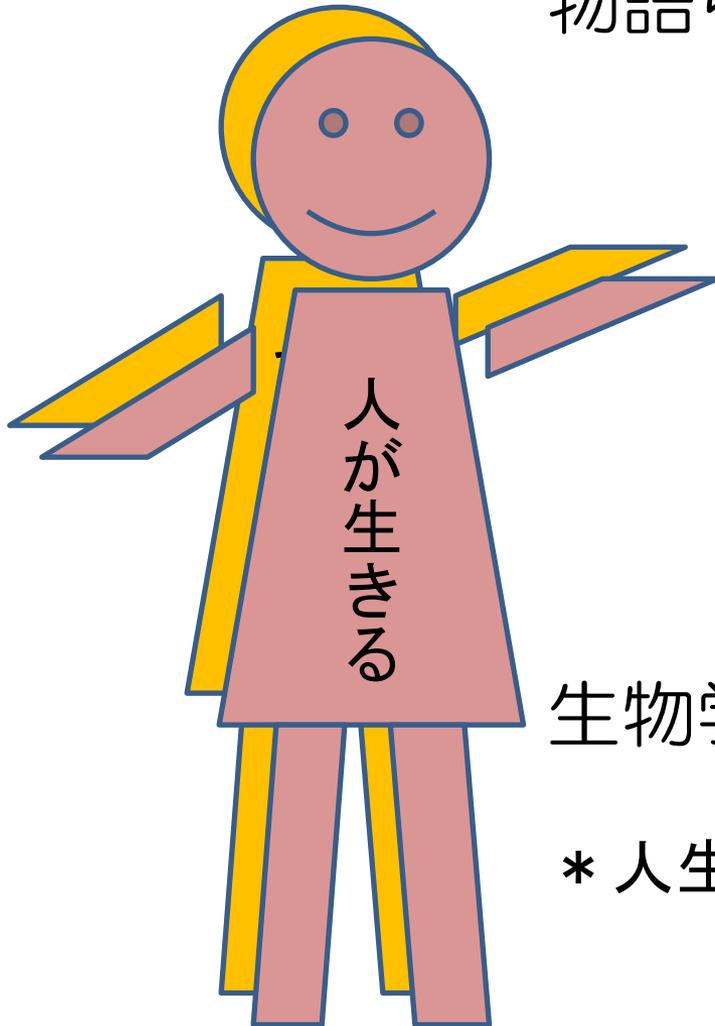
すべをなみ妹が名呼びて袖ぞ振りつる

死者への祈りの起源

- 言語の働き 事実を記述する／語る仕方で働きかける
 - 呪い ことばや語り方のかたちが大事(「開け、ゴマ!」でなければ相手は動かない／相手を支配しようとする: 指令・命令)
 - 祈り ことばの意味が大事／相手を支配するのではなく、相手の好意に期待して、依頼する・お願いする
- 祈る姿勢 相手との交流(コミュニケーション)を求める
 - 眼前にいない 呼びかけても応えは返ってこない相手
 - 呼びかけが届くと看做して(あるいは信じて)、呼びかける
 - 世界(超越者・大地や海・死者たち)に向かう

人のいのちの二重の見方

物語られるいのち biographical life



生物学的生命 biological life

* 人生の展開のために、
医療は土台である生命を整える

人のいのちの二重の見方

物語られるいのち biographical life



生命

生物学的生命 biological life

* 人生の展開のために、
医療は土台である生命を整える

人のいのちの二重の見方

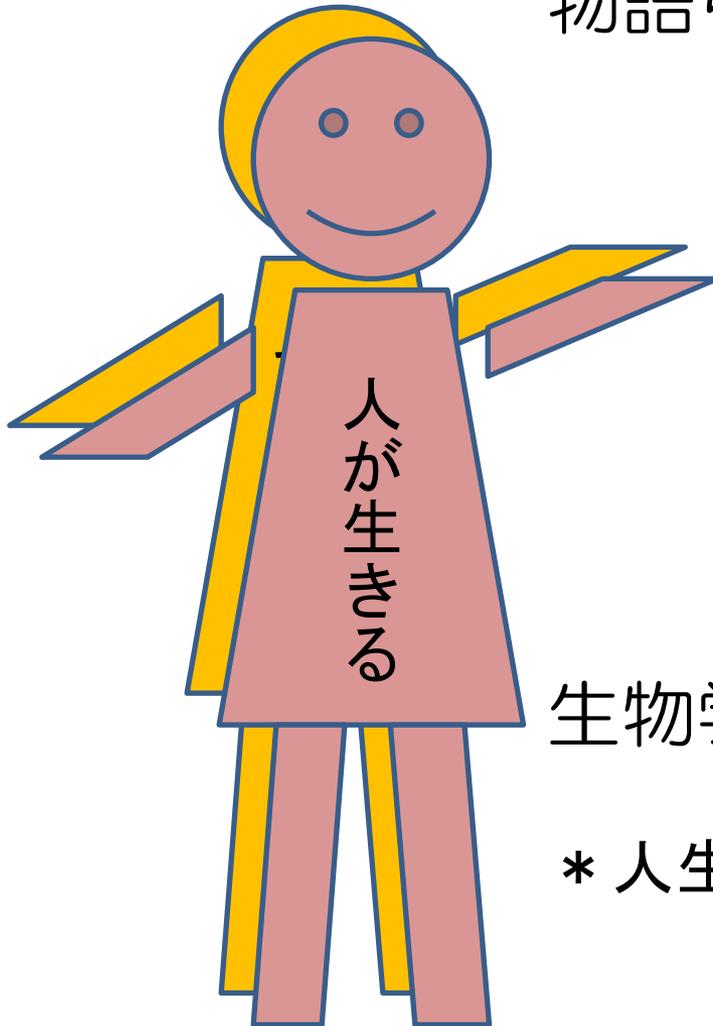
物語られるいのち biographical life

人生

生命

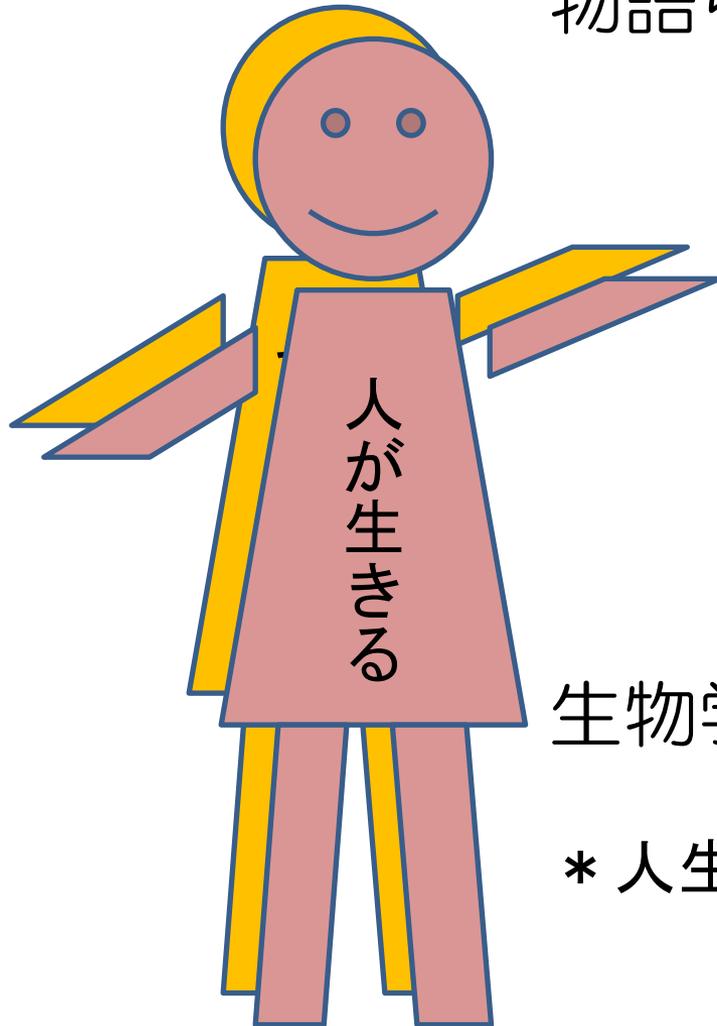
生物学的生命 biological life

* 人生の展開のために、
医療は土台である生命を整える

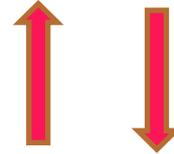


人のいのちの二重の見方

物語られるいのち biographical life



人生



生命

生物学的生命 biological life

* 人生の展開のために、
医療は土台である生命を整える

私たちの生は、《物語られるいのち》

- 誕生から死まで、人々のネットワークの中でダイナミックに生きる物語り
 - 私は自分のいのちの物語りを創り・語りつつ生きている
 - 私の物語りは、他者の物語りと交差する
 - 私たちは《**身体**の**生命**》という点では、別々で独立している、でも 《物語られるいのち》としては
 - **私のいのちと親しい者のいのちは別々ではない。相互に浸透し合っている**
 - **かつ、私の物語りは私だけの物語り**

物語られるいのちの死／身体的生命の死

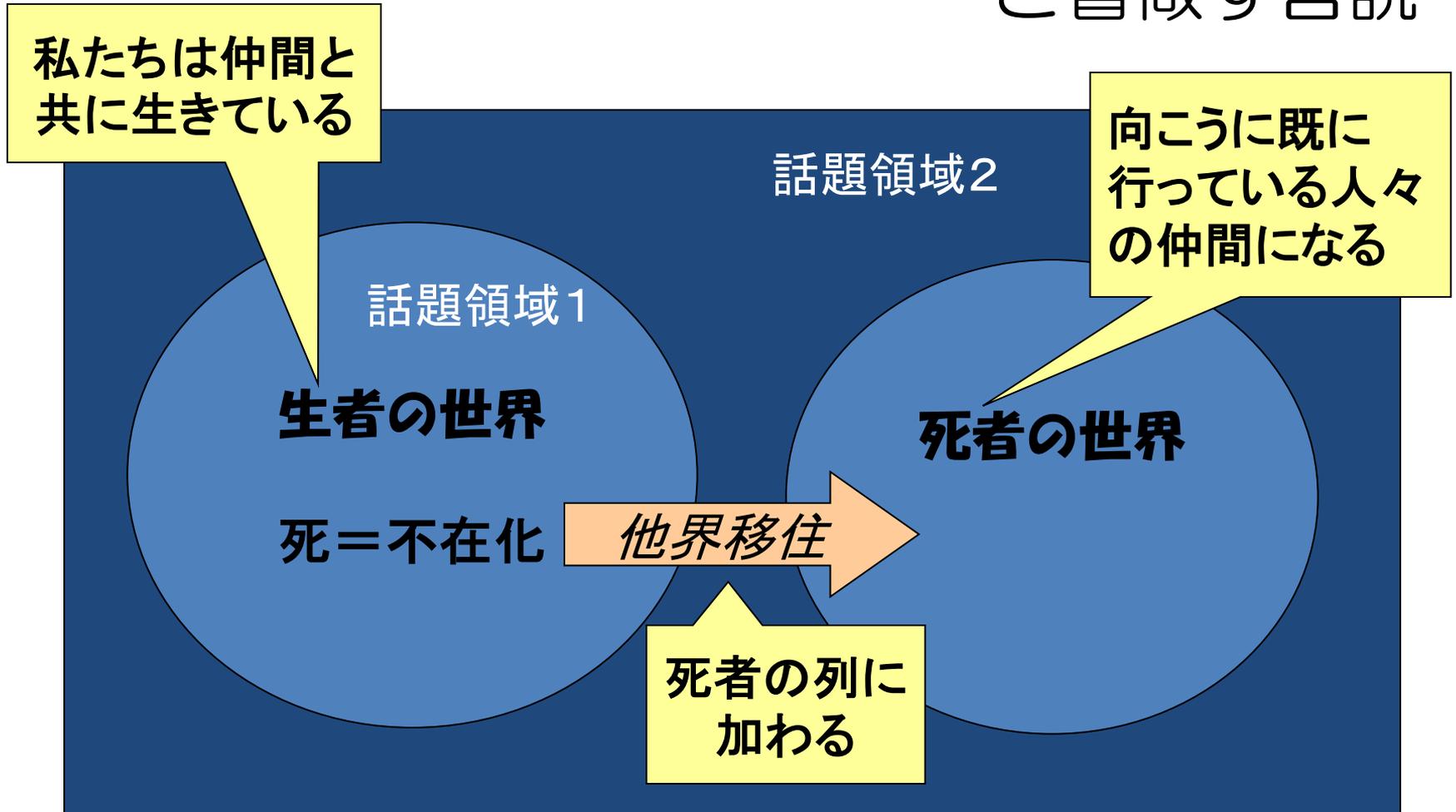
- 生物学的生命は各々独立／物語られるいのちは相互に重なり合い、浸透し合っている 　　だから→
 - 人の死は、人生の物語りが重なる人々のいのちに欠けをもたらす：
 - 親しい者の死 → 私のいのちの一部の喪失
 - 身体を土台にして展開される意味の世界 身体が減じた後もあり続けるのではないか、という想いの基
 - 《遺体》 生命を失った身体：物語られるいのちの終りを確認する土台
 - 単に《抜け殻》なのではない。《その人そのもの》とも看做される

死んでからのこと

死者の世界？

- 私たちの文化は、あたかもどこかに死者の世界があって、死ぬことはそこに行くことであるような語り方をし、死者を送る振る舞いをする
- でも、死者の世界について、必ずしも確信しているわけではない
- それでかまわないと思っているらしい。
- 物語られるいのちの延長上に想定される物語り

「死んでもひとりぼっちではない」 と看做す言説



死後の世界をリアルなものとして前提する必要はない。
このような語り方によって、構成されるもの

人生の物語りの終わり？

- 死の問題は「ひとりぼっち」になることにある
- 逝く者、送る者共に、「ひとりぼっち」になるわけではないと、言い合う
 - おまけに「お迎え」まである
- 人生の最期の日々を過ごす際の最大の問題 孤独・孤立 の延長上にある問題
- 物語られるいのちの延長上に想定される物語り

別世界移住型以外の死の理解： 復活

- 《人格的交流が不可逆的に断絶する》仕方の理解
 - 身体と共に人格もあり続けている
 - しかし、その活動を停止してしまっていて、再開は望めない = 現世内不活性化
 - 生者との関係の断絶
 - 「眠る」こととして語られる
- このような考え方をする文化においてこそ、「復活」ということが問題になる
 - 新約聖書の「ネクロス」は死者&死体
 - 人生の物語りは現在中断している—やがて再開する

別世界移住型と 現世内不活性化型の並存

- 復活 ← **現世内不活性化**
- 金持ちとラザロ(ルカ16:19-): 死んで宴席に行ったラザロと、陰府で炎の中で苦しむ金持ち ← **別世界移住型**
- キリスト教の教説は、この二つの線を統合的なストーリーにしようという努力 しかし、
 - 「天国に行った」と「ここに眠る」の並存は、
人の心理としては自然！？
- 私たちの周辺での、二つの並存とパラレル？

存在の変様・・・千の風になって

私のお墓の前で 泣かないでください
そこに私はいません 眠ってなんかいま
せん

千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています

秋には光になって 畑にふりそそぐ
冬はダイヤのように きらめく雪になる

朝は鳥になって あなたを目覚めさせる
夜は星になって あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないでください
そこに私はいません 死んでなんかいま
せん

Do not stand at my grave and weep
I am not there; I do not sleep.

I am a thousand winds that blow,
I am the diamond glints on snow,
I am the sun on ripened grain,
I am the gentle autumn rain.

When you awaken in the morning's
hush
I am the swift uplifting rush
Of quiet birds in circling flight.

I am the soft starlight at night.

Do not stand at my grave and cry,
I am not there; I did not die.



おわりに代えて

やがて死に至る生をどう評価するか